

ニーチェとキリスト教倫理

木 阪 昌 知

人類の未来と運命に関する形而上学を宇宙空間的高揚の展望と絶頂で先駆的に認識、予見、弁証することによってディオニュソスの現存在の実存解明を20世紀に透視せんと試みたニーチェの実証科学的精神は、あたかも *Große Zeit, tolle Zeit, ganz verteufelte Zeit, in der es hoch und überhoch hergeht*¹⁾ の代償として狂気の痙攣が突如 *Adrian Leverkühn* を没落の深淵に引込んだ如くトリノに昏倒した。ニーチェ45歳、神々のようやく黄昏はじめた19世紀も終りに近く、没落する実験的生を自ら *erleben* した孤高なる精神の終末であった。

倦怠の啓示を *aufheben* して、無際限に強要する超感性的世界の障碍を現象の世界に看破し、あらゆる対立と間隙の尖鋭化に逆行する空疎な思弁を排除して強者の徳を権力への意志に代置し、*Wollen* を命題にした新しい価値の録板、普遍者に対する個体の優位を確立して、過剰な生に溢れる陶酔的現実を再生せんと試みたニーチェの歴史的展望は、如何なる対等性や追体験を許すことなく、ただ歴史の評価にのみその裁定を認容して抒情的没落を実験したのである。一切の規定と観察の根源を絶対的に排斥し、無規定な現存在の可能性を逆説的に拡大しながら創造的主体の全貌を歴史的確実性に究極するニーチェの態度はそれ故、真実を真実の敵と覚知して、多数の倫理を背徳の論理に総計し、高貴な心情の慰藉的期待を不協和分裂的無限旋律に対照して汎神論的遠近法を試みることであった。がしかし、思惟の荒野を対照する意図的存在経験の狂信性は、独断が先行して危機が充満し、理念の実体化を論理的に妨げる形成不全

型生長形式の倒錯が現実となり、到る処で無道德な狂気を蒔き散らす進行性脳麻痺の徴候を伺わせるに十分でもあった。精神病理学者達は形而上学による弁証を待つまでもなく、ニーチェをしてこの異常に高まる緊張と興奮、たえず拡大される意識内機構の多様にして複雑、矛盾に満ちて幻想的な心的傾向、生産と主張の抑圧された内的論理を極めて因果疑問的に固定化し、加えて作為的且つ不誠実にニーチェを理解してこの傾向を看過しなかった。世界観論争の未来的展望に低次の経験的確証を援用し、徹頭徹尾精神的、感動的な運命愛の流露する創造的過程を底意ある散文的結論で了解し、レーテル、レナウ、モーパッサン、フーゴー、ヴォルフ、シューマン等の経過状況に於ける類似の錯乱を強調して同一時限で処理してしまったのである。ニーチェ思想の理解を、生活の現実と主張の楯に分離して追究し、しかも、副次的原因を意図的に関連づけて前景とする手法は、シュペングラーを理解するにニーチェとゲーテを否定してヒットラーを結びつける様なものであり、急迫する時代の症候に総体的健康を強制して生理学的先行条件とする Kolportage-psychologie のごときものである。確かに、破壊的傾向を診断しうるに足りる混乱と、決して偶然的ならぬ内的要因が遺伝的とも思われる程繁茂に発生し、しかもその作品は病気の意義に関する問題で充ち充ちている。しかし、ストイックなまでの精神生活を作業に於てとらえ、作業能力の総合性としてニーチェを把握せんとすればおのずから生じる限界があり、それを無視して心的現象の発展する全体を経験事象に従えば、存在自体を隠蔽して茫洋と編成された科学的概念の範疇となってしまう。人格に関する誤った独断論に出発する心理学的誤謬はそれ故、思惟しつつ創造するニーチェの精神性と、間断なくせまり来る経験の戦慄が融合しては回帰する感性的官能のディオニュソスの陶醉、即ち、群居動物的要求を断固として退け、圧倒的征服を強いて率直な意志、一切の価値観に「否」を發して確乎たる共感、創造的犠牲の上に成り立つ破滅の倫理をニーチェという存在の地平に確認することは不可能である。

危険な歴史の曲り角に直面して、人類の歴史を総体として自己の歴史と感じながらしかも、荒涼とした煉獄の異教に自ら実験を試みて闘争的となる様な精

神は、存在そのものが比喩的であり、冷ややかに完結して鋭く研澄まされた警句は全て仮借なき自制と誇り高い精神を高揚する神話である。したがって、経験的観察に基づいて病的過程を診断せんと試みるならば、客観的認識の手段として病歴を検証することや、健康な批判のもとにニーチェの哲学を観照するのではなくして、全存在の究極する限界経験と憂鬱に対照されたアジア的七曜の官能に陶酔する抒情詩に、ヘラクレイトス、ゲーテ、ナポレオン、そして、アーリアン・レーヴァーキューンの自由闊達にして熱狂的殉教の悲劇的本性を投影してみることである。そして孤独に耐え、生存の条件としてむしろ孤独を要求する傷つき易い魂が、偉大な力に課せられた圧倒的影響力を果すべく、陽光と至福に背を向けて暗雲と稲妻のもとに狂気の終極を迎える自己破壊と自己創造のディオニュソス的世界を哲学的課題として認識すべきである。かかる意味に於てこそ病理学的契機は普遍的価値観に埋没する全人格的運命を副次的意図なく昇華することが出来るのである。ニーチェが偉大であったか否かはそれ故、彼が進行性脳麻痺で昏倒したとか、偏頭痛の発作と慢性的胃痛が生を悲劇的に展開していったのではなからうかという推測と全く無関係な時限の問題である。

1

ニーチェはソクラテス的精神のエウリピデスの典型を無能力な Dekadenz の表現とみなし、被支配的感情としての遺伝的弱さを至高の諸価値の病的体質にみてとった。生理学に対する神学の優位を倫理的世界秩序に搬入して、教養化され、精神化された内面的狂信主義の捏造に由来する禁欲主義的平和運動を権力感情に逆転し、虚言にまさる確信を強さの Pessimismus に態度して、聖なる定言的命法をニヒリズム的な意味に於て是認せんと断言命令するニーチェの異議は、この非戦闘的理想の教育に柔軟化し、生理学的退化をひきおこす服従の意志を官能性の不倶戴天の敵と承認し、弱者や凡庸な者達の道徳的傾向を比較民族学の段階に検証することであった。急進的抗争の固有性を支える手法の尊大さはそれ故に、征服的、復讐的激情に支配されてはいたが、総じて純粹主

観の原理を去勢して尚人間を偉大たらしめる総体的洞察があった。これがニーチェに於て評価されるところである。高貴なるものを正当に扱い、全自然的摂理に因果する一切の輪廻を人類の法則とし、未来的展望のもとに歴史を審判して第一運動に緊張すること、批判的悟性への執着を更に闘争の衝動へ実践することであった。ニーチェによって思惟された真理の全体を反時代的精神の深遠なる孤独の絶頂に於て観照してみればおのずから、古代的根源が新生するペルシャ的福音をニーチェにみるはずである。しかし、弁神論のある帰結が道徳的判断を拒否させたスピノザの場合と違って、形容矛盾の驚くべき能力を無条件に許容するニーチェのみせかけは、パウロ的類型が啓示する *Ressentiment* のパトスを詭弁的心術を用いて相続し、そればかりかディオニュソスに名をかえたニーチェ自らが悦ばしき音信の報知者として十字架にかかり、救世主として哲学の衣を着たイエスの影響をギリシャの世界に予言せんとしたヴァーグナーに出会う。これが *Also sprach Zarathustra* に於ける *Unbedingtheit des Entschlusses* であり、*Nachahmungsreflex* である。この矛盾の反逆に充ち充ちた形而上学好き無神論者の帰属する *pulchrum est paucorum hominum* は、医学的意味に於ける健康が固有の二義性を逆説的に混同して誤った起源の推理を出発点としているにしても尚彼の実存解釈を生物学的、医学的とさせるに十分である。この場合問題となるのは外ならぬニーチェに於て、科学的認識の否み難い妥当性を可能ならしめる事物認識が *psychisches Trauma* を以て理解可能性を実証しうるか否かである。換言すれば、思惟の淵に向って真理を遡及する認識の情熱に方法論的正確さをもって事実を対立させる応用の論理は期待可能であるのか、及至は、固有の二義性をもってあらわれるニーチェの病氣と健康の概念をどの地点で了解するのか、哲学は果して科学に対して主導権を持ちうるや否やである。たとえば、哲学を前提する宗教は科学的真理を追究するに際しても全く同様の立場をとっている。このことからすれば方法と意図はそれに導かれる結論より解釈一般の普遍妥当性により多く依存しているし、確実性に究極する仮定の制約はむしろ認識の根拠に説得力を与える。ナポレオンが持っていた英雄的自己意識が時代的精神の運命を決するという異常心情状

態に共通する瞑想的存在合一は、生成の哲学に於ける存在の超越的再生産に外ならないし、経験観察的自己理解を必要とする場合ですら例外的に根源的一者を固執して優越する性向は、イエスに一連する *pathologische Lüge* であり、この *Eidetiker* 達にとって個体を固有化して自ら律法の基準となる心的体験の因果了解は、歴史の実存を先駆的に決意して思想を総括する精神の飛翔というよりはむしろ、不健全な優格観念に抑圧されて *metaphysische Wahnidee* をひきおこす *Querulantenwahn* の随伴現象そのものとみなす方が一層解釈可能であるし、その偏執する感動の錯乱は、*Sein in der Welt der Seele* を個別的感情に混濁して、*tödliche Katatonie* に自ら解放したがる *Wille zur Krankheit* と理解するのが妥当の様にも思える。奇妙に関連する状態の多様性と覚性の錯誤を疾病出現と病的過程の *pathologisches Erlebnis* に看取り、対立する概念を究極して直線上に認識せんとする試みに生起して障壁となる諸領域の範型を、概念の固定化を了解する契機の主張に規定相対的応用の論理の優位性を供与して無制約な分別の欠如を退け、無気力に衰退する時代の災禍を科学実証的に弁護して、人間の諸価値に関する実存的位階秩序の全体を生医学的意味に於ける存在の内実確立せんとするのは、正当にして且つ有効な手段であり、新しい次元に於ける健康の規準である。この意味に理解する *soziales Ich* は、それ自体を越えて独自の意識で体験される個性的表現に優先する健康的良心を意識外機構の了解可能な関連のうちに総体直観し、有機的連関に統制された *kollektives Bewußtsein* に到達することである。生産と向上を改善して無思想な画一化を推し、絶望的な *Langweile* に甘んじて如何なる刺激もひきおこしえない観想的世界の悪意に満ちた遺棄は、協同に流儀する凡庸化の過程を文明社会に帰結している。

偉大なる民族の偉大なる精神が宿命とする生の審美的世界観を狂気する記念碑的高次の隔世的課題は、歴史の意義を空無に帰する模造と恐怖の氾濫で最早逆転不可能である。卑小で弱々しく、意欲なきまでにしんとおした諦念的抑圧の非合理性は、機械化と組織化の管理する消耗の機構に軽佻浮薄な傍観者、反貴族主義的で悪趣味な群集を創りあげている。それはまさに、*Die Mittel, sich*

wieder „mit Gott zu versöhnen“, sind, wie billig, Mittel, mit denen die Unterwerfung unter den Priester nur noch gründlicher gewährleistet ist:²⁾ ところの罪とか赦しの概念, 作為的なまでに「悪意」と深い契りを交わしている者への愛 Friede mit Gott und dem Nachbar: so will es der gute Schlaf. Und Friede auch noch mit des Nachbars Teufel!³⁾ ただ苦しみのみを増大させる道徳的行為 Das Mitleiden, sofern es wirklich Leiden schafft——und dies sei hier unser einziger Gesichtspunkt——, ist eine Schwäche wie jedes Sich-verlieren an einen schädigenden Affekt,⁴⁾ 個人的動機に原因する一切の内面性を厳しく罰する無私の態度 Nie hat ein Mensch etwas getan, das allein für andere und ohne jeden persönlichen Beweggrund getan wäre; ja wie sollte er etwas tun können, das ohne Bezug zu ihm wäre, also ohne innere Nötigung (welche ihren Grund doch in einem persönlichen Bedürfnis haben müßte)? Wie vermöchte das ego ohne ego zu handeln?⁵⁾ に由来する人間の, 宗教的偏見に歪曲されたキリスト教社会に於ける憂鬱の残滓と起源を全く同じくしている。苦痛と意欲に鍛えられた創造的精神が, 自由闊歩した豊饒の大地は甚だしく物質的な概念の負債感情に由来する恐怖の原点, 理性の誤謬に基づく宗教的偏見が導入され, 神とのかかわりなくしては最早成りたちえない植物的倒錯者, 生命的欲求に起源する一切の実存的決断を放棄して多数の倫理に孤立した精神衰弱者, 理論なき生成妨害が解放する現象的人間に充ち充ちている。人間全般にわたるこの無価値と下劣さ, 自らの不運をも分ち与えずにはすまされない傾向を疚しい良心にかりたてて嘆息する不条理は, 終末的世界観に埋没して極面を見失った出口なき実存の Zerfall der Individualität である。Der Affekt der Faulheit nimmt jetzt Partei für die „Wahrheit“⁶⁾——; して Aufgangs-Instinkte は Niedergangs-Instinkte にその所を譲り渡し, Wille zum Nichts が生への意志を完全に支配してしまうという Krüppel の世界, 善良で病的に育成された卑小な種族と畜群の大挙する technische Kultur の時代, セネカやルソー, ダンテにカント, そして, ペシミズムさえ消化してしまえるカーライル, 偽善的口

調で市民を5線に語るリストのみが健康に生きられる世紀を、あたかもカルタゴが崩壊を自らの運命として避けられなかった様に体験している。この末期的表象と未来に向う構想力の乏しさに極まりない屈従を押しつける道徳への中傷に対してキリスト教は、根源的象徴主義を聖化して巨大な廃虚世界に禁欲的理想を具象する背後世界の創造で美德の衣裳に包みこみ、精神の矜持と気力に対する憎悪、官能の歓喜に対する憎悪で復讐するのである。即ち、ニーチェに於て病気と健康の概念が、医学的意味に於ける健康を本当の意味での病気の徴候であり、内面乃至は実存の健康を本来的な意味での健康とみなし、無実体なものに外見的矛盾を喚起する逆説的混同のパラドックスを感得している弁証法に同じく、Gottes Reich で始まる理性の完全な勝利、キリスト教的美徳の外観を華麗に装う心理学的発明、如何なる動機をも無気力にさせる彼岸の世界を個体の保存本能に提題して意気を沮喪させ、支配を一層可能ならしめる無私とか隣人愛を強要して wahre Welt を創りあげる。悔い改める者は全て赦され、至福なる安寧と途方もない平和が約束される世界を仮に真の世界とみなせば、有為転変苦悩に変遷して偽造と偏見に蹂躪されたこの世は悪であり、執着すべき現象の認識形式は信頼の根拠を持たず、善悪の彼岸に永遠に自己創造と自己破壊を円環する仮象の世界である。弱者を征服する力への意志が権力の把手となる破壊の倫理、卑小で弱々しく、無力で妬み深い賤民に可能な問題を断固退ける位階秩序、何者も自己にむかう愛にまさる愛を行なう非利己的心情に支配されぬ世界にあって真の世界はまさに救いであり、真の世界を更に押し進めて僧侶への服従を一層根本的に保証する罪の世界はいよいよ聖化され、しかも、形而上学の擁護する復活の思想は救世主イエスを神化する福音としてキリスト教を比類なき地点に於て確立している。したがって、選択可能な択一が余儀ない状況のもとでは、たとえ意欲の解放する世界内存在が悲劇的世界観の展望を生む本来の認識に拡大する根源であり、永遠の世界秩序に輪廻する自由精神の啓蒙する過度の必然性を要求しようとも、無知に同盟する道徳的偏見と風習の倫理は代償の大きさに於て凱歌を得る。この押しつけがましくも不当な特権に君臨する支配的本能の渴望するみごとに規制された極端な献身の世界は、その正

当性の可否を論じて自ら神的存在にならんとする者、科学的実証精神をもって神の特権に蛮勇をふるい存在証明を試みる者、感傷の窮迫する観想的世界観に自己を享樂する冒瀆者には極めておうような威厳をもって異端を宣告した。その際キリスト教にとって最も不快な出来事として神学と既成の諸価値を総動員し、急迫不正する侵害に対処すべく伝統の權威を楯にとらなければならなかったのは、これら強度の個人的自我に覚醒した者達の中でもとりわけ、仮象の世界に存在の意義を発見してしかも現存在に内在する実存の内面を進化論的意味に於けるふだんの生成を超克に了解し、道德の系譜外にあって形而上学を先頭にしている様な精神である。この様な精神が使命とする世界普遍的目標は、外観に徴表する *Ding an sich* を存在の根底に把握し、諸価値を支配する価値の録板を純粹形而上学による形而上学批判によって問題化し、彼岸的命法に対する此岸的世界解釈をもって現世界的意義を独自に展開すること、*Du sollst!* にもまして高次の階梯にたつ *Ich will!* と *Ich bin!* を意欲することである。

最も異様で苛酷な諸条件の中にあつてすら尚手離すことなく生命への意志を歓喜し、*ein Neubeginnen, ein Spiel, ein aus sich rollendes Rad, eine erste Bewegung, ein heiliges Ja-sagen*⁷⁾ の発言をもって断言実行する生の肯定、投企と参画に究め難いものをも超克する創造者の成育は、キリスト教の地盤をその根底より震撼とさせるに十分であった。認識のうちにはなく創造のうちには、最高の仮象を高貴なる興奮のうちには、そして、探し求める者としてではなく *eine eigene Sonne* を創造しようとする意欲に救いを見い出そうとする *höchster Mensch* の究極する時代の改革は、楽観的合理主義が支配し、非合理的なものを迷信として力を論ずる唯物論の氾濫とあいまって形而上学の弁証する *Evangelium* をもつてして最早有害無用と断定することは困難になってきた。*der zahme Mensch, der Heillos—Mittelmäßige und Unerquickliche*⁸⁾ さえもが既に自らを目標及び頂点として、歴史の意義、高次の人間とを感じる様な終末への加速度的状況に緊迫した混乱の時代に、神の原因と根拠に関する実証科学的精神の懷疑の抬頭と、加えて人間にとって何らかの意味のある世界、人類の未来に不可欠の *Ein Wozu? Ein neues Wozu?*⁹⁾ 意志を弱め

稀薄にする聖なる目的の欠如した真なる世界は、超個的永遠不滅の勢力を圧倒的な權威と智謀に保つことは最早不可能となった。人間の新しい偉大さを知る為の、人間を偉大にさせるべき未踏の道をさぐる哲学者の理想に異端の鉄槌を下すキリスト教心理学の虚言するところは、外観的矛盾を喚起する逆説的混同のパラドックスに現われた罪の世界の固有の二義性に於てであった。しかし、存在の地平に実験された実存解釈の到達するニーチェの世界観は、諦念的意志否定の解脱する放下の輪廻に入信することでもなくば、物質文明の華やかに興隆して無気味に同居する束の間の倦怠に酔いしれることでもなく、ましてやネストリウス派の遺産を後継することでも勿論なかった。したがって、現実を逃避して頽廢と忍従に故障した非生産性の麻痺状態に完全と対立する悲慘のリアリズムは、超自然的存在をも思弁不可能な認識批判にかりたて、実証科学と哲学の谷間に精神的諸現象を経験科学に基礎づけて構造心理学を生起させる生の解釈学を誕生せしめる結果になったのである。これはディルタイ、ハイマンズの功罪である。がしかし、自然的人間を疎外して一元論的唯物論に新たな調和を求めた神秘主義的密教思想の転向は、現実的な自我の投射に *transzendente Ontologie* を確立したが、それはあくまで特殊的形而上学への変貌であって、その普遍性を功利主義的経験實在論に喪失したのではない。単に理論外的因子を実験組織する客観事象から存在の内面的形式へ移行したにすぎないからである。ディルタイとハイマンズの先験的観念論は経験の限界を越えて超感性的対象にかかわる理念の客観的實在性の主張とみごとに調和して絶対的真理の要壁を、批判主義をもって形而上学を究極的に基礎づけるヴント、体系的に宗教的、精神的一元論を説くラッドの生理学的心理学にその方法の完成をみた。理論的にはマクドゥーガルの進化論的、生物学、目的論的心理学をみせかけながらも行動主義的有機体論に反対し、意識の基底事実となる能動と受動性の力の対抗を普遍的、非人格的力の原理に規定して自然淘汰万能の思想に対決をせまったのである。この要素主義的観念弁証法の背後で図式化された世界観、生命観は、神の有意的、目的論的世界創造及び世界維持を説く目的論的世界観と、目的と手段に介在して自然因果的有機体論を可能ならしめる目的論

的生命観に外ならず、個人の心的活動の特異性のみにかかわる *kollektive Psychologie* とも言えよう。宗教的経験の本質を構成する *religiöser Wert* は宗教的諸現象の心理構造を心理学的方法によって探究する *Religionspsychologie* の実践化を得て深層心理に動機する個別化の人格分析、心的生活に於ける宗教感情の発達過程、主体的実存の内面にかかわる思惟の限界を完全に臨床し尽し、類型化と画一化への制度的促進を一層慣習化したのである。抽象的な人間心理の発展段階に応ずる唯物論的合理性は、意識の根本構造から現われて来る *religiöse Apriori* を信仰裁判して、歴史の多元性と偶然性、人類社会の発展に退化の可能性を強調し、更には観念的宗教哲学や主情主義的心理学、形式社会学とともに、プレアニズム説、呪力説、自然崇拜説、デュルケーム派の社会学的なトーテミズム説、レヴィ・ブルールの前論理説、フロイト説などの渾然一体とした護教効果に援護されて益々進行の勢いを強め、願望に対応する超現実的態度に新たなる道を開いた。即ち、個的存在としての利己的性向を去勢して、全体的美的調和をはかるために非歴史的な体系的因果関係を向上促進する相互依存を背景に組織社会の基準と拘束受容の程度を一切の価値尺度とし、意識に内面する実存の感覺的徴表と純粹経験を認識の基点として、主知主義に傾倒する反時代的にして且つ系譜外の精神を精神病理学的に実験心理したのである。ヤスパー^ス、フロイト、クレペリンの批判分析に多くを相続しながらしかも臨床的立場から異常な現象の独自の解明を心的機能に試みる意識なき心理学の帰結する *Haltlose* は、まさに現代キリスト教形而上学が中枢とする *Allegorie* である。

コントの実証、實用主義的批判、発展的全体把握を妨げる悟性的固定性への固執排除を命じるヘーゲル、弁証法的立場から空疎な抽象的絶対を求める思弁的形而上学に克服をせまるマルクスの帰納的推理の主張にも拘わらずこの形而上学は、演繹的論理を内包当為する超感性的世界観に突き進み、本来の超越に開示する生成の超越的根源を彼岸的意味での *Hinterwelt* に現象還元し、私的世界観の内省する形而上学的幻想に急進して行った。最大の闘争の為の最大の武器、危険としての最高の危機、悪の為の最上級の悪事を退行する絶対的理念

にまで高めたこの宗教心理学は、正統的信仰の偉大なる教父アウグスティヌスの敬虔さ、愛国的態度をもって忠誠と誠実に誓いをたてたウイクリフ、フィヒテ、ヘーゲルを斥け、ハルナックと対立しながら》聖なるもの《の非合理性と神秘的側面をアカデミズムの側より力説したルドルフ・オットー、教会統一及び教階制度の思想に最も明確な規定を与えて殉教したキプリアヌスの純潔、根源的一者として真のキリスト者を宗教体験したキエルケゴールの激しさをキリスト教とは何か異質のもの、当面する形而上学の危機とは無関係で役立つものとして別個に扱い、柔和で、真面目で単純純潔な天性に支えられた牧師達、精神的に生きる人達の精神の権力を信じて粗野な暴力に目もくれない教会には恐れにちかい畏敬がかつて存在したことさえ看過してただ、病的で蒙昧主義的理想へとおもむく背信に権力を支配すべく不条理を徹底する。不断の創造的活動に過程する生命の根源的衝動は、既に成り立った世界に仮定する機械論、目的論と全く相反する認識の基盤をその根拠にしているが、生命の創造的進化を緊張の弛緩する物質化と固定化に於て加工製作するキリスト教心理学はこの点に於て資本主義的生産様式による人間の機械化、奴隷化への抑圧された精神的頹廢とその傾向を一にするものである。

歴史的に形成され変化する社会意識の一種として宗教が限定されるならば(まさにキリスト教はこの対応に外ならないのであるが)、超自然的非論理の核心も異常に空想的幻想的な世界観の徴表を帯びてくる。異質的に世俗を優勢禁忌する別世界的系列の超感覚的意識はこの点に於て意識構造と歴史的本質の矛盾を克服して了解可能な形而上学的証明に達してはいないからである。それにも拘わらず永遠の基礎を畏怖と崇敬の神秘経験に保存し、感情の頂点として没我的忘我状態に導く意図の心理に内在する神話的世界像は、宗教專業者による支配の絶対化にあり、超越的存在の神秘的な憂愁は奴隷社会に彷彿する唯物史観への宣伝広告にすぎない。確かにこの永遠の基礎となる宗教的感情と態度にはその起源と根底より異なる利己的動機に支配されている。神の為にのみ生きることを要請して神の主権的恩恵を強調したカルヴィンや、敬虔主義的な内的体験で群をぬくカール・ハイム、ヒッポリトス、プフライデラー、メランヒトン、ヒ

エロニムスと枚挙にいとまないこれ等神秘主義的宗教体験の真の覚醒者達に顕著な宗教的態度には、恐怖と願望を搾取して福利や予報を手品する利害関係も封建的政治勢力へのかけひきもなく、ただ心のよりどころを求めて唯一神を描いて畏伏と忠順を捧げ、平等無限の恩寵を期待することだけであったが、実証調査の方法と結びついて社会心理学や文化人類学にも発展して教皇権威の護教主義に懸命な呪術的宗教の帰結するところは、プラグマティズムの限界にとどまって実証の海にさまよい出る密教思想である。歴史的に形成され変化するこの社会意識のとどまる場所を知らぬ幻想的世界観と超自然的非論理の核心に根源して普遍なる存在を形而する包括者はしたがって、当然のことながら奴隷宗教と別個に扱われるべきであるし、超現実的態度を求めながらも現実世界の最下層部に停滞する教会や教皇の主張は悪しき福音を濫用する国家権力が目的であり、恐怖と迷誤、僧侶の作為する詐欺に起源して呪物的崇拜を強いる Animismus には最早キリスト的典型さえ輩出不可能な偶然性と退化に充ち充ちて居り、今尚超自然的、歴史的 Religiosität が可能であるとすれば、それはニーチェ的意味での Ein Wozu? Ein neues Wozu? を果しうるや否やでしかありえない。人間にとって何らかの意味のある世界、人類が未来的展望のもとに偉大さへ向う聖なる目的を屈従と恥辱、偏見と蔑視の色彩濃い無私、隣人愛、平等思想の中に予見可能であるのか、苛酷な生の不合理な浪費に積極的意味を要請して尚信仰たりうるや否やに外ならないのである。

2

19世紀を純粹に形而上学的意味で問題にすれば、何者をしても圧倒しないでおかないルター的精神の過激なまでに緊張した16世紀とは比類ないまでにその関連は中断消滅し、アウグスティヌスの敬虔さとかハイムの内的体験の高潔さについても最早如何なる追従もなしえない観想的世界観の驚くべき極面がある。しかも、宗教の本質である信仰を形而上学的認識と対立させ、学問的に認識された歴史主義のみが信仰に積極的価値を持つというアルブレヒト・リッチュルや、救いは歴史的に実現されてこそ倫理的意義を持つというヴィルヘル

ム・ヘルマン、そして歴史的なものと現代的なものは絶えず総合的にかかわりを持ちながら克服されるというエルンスト・トレルチュの自由主義的 神学の立場を、諸々の要因とからまりながら制約発展して流れる目的論的世界観に還元し、宗教の中枢に優位して先行する形而上学と、絶対他者にして根源一者なる超越的存在の超自然的 神性を生活環境的歴史主義の流動的意識状態に於て解釈し、経験主義的態度で宗教的真理を追究するウィリアム・ジェームズの倒錯的プラグマティズムをもってして神学を弁証したのである。それは敬虔な信仰に支えられた聖徒風伝記に値する偉人達と、世界中の壁に悪魔を描きつけて罪の世界を享楽するパウロ的典型を比較してみる様なものであり、キリスト教の根幹となる聖書的核心を思い起してみれば疑いもなく、自ら徳を實踐して至福なる神の世界を自己の内なる安寧に求めたキリストに形而上学的意味での極外者、唯一者以外の称号を付与してネストリウス派のキリストをペルシャに認める様なくだらなさがある。したがって、歴史的に形成され変化する社会意識の一種として限定されるべく災禍に氾濫し、歴史が必然する時代の要求に逆行して病的で、腐敗の根からのみ成長しうる様な弱さの本能、疚しい良心に由来する永遠の矛盾は1世紀の意味でも、16世紀の意味でもキリスト教ではなく、一定の見解、観念、概念、表象を規定する思想の範疇にしかとどまりえない。更には政治制度の歴史的 性格やイデオロギー、観念、理論を総称する上部構造が、既存の生産構造や社会の物質的存在たる下部構造に依存して形成されるといふ史的唯物論にみる社会発展の法則に逆流して、下部構造に反作用しながら直接的規定を退け、相対的独立に並行しながら感覺的要素を排斥し、独自の存をその発展段階にさかのぼり、科学的形而上学の立場をルネッサンスの頃にならったのである。神の非物質性から精神が演繹され、更に精神の独自の産物としての思想にも又非物質的な非存在性を認めることにより創造的役割を進化の過程に典拠するといふ、この俗流化された史的唯心論の主張は生産様式、経済的な地盤に於ける変革に附随して社会的意識も根本的に変化しなければならないという巨大社会の歴史的 要求さえ無視し、被征服者階級に大衆を圧迫してキリスト教的奴隷思想を徹底せしめる支配的社会意識に袂を分っているのではあ

る。

何時の時代にも不遇に苦しみ、改革を要求する時代の軌轢に歪曲する批判精神の抬頭はあった。一切の確信をその根底より否定して容赦なく厳しいこの現実には、キリスト教社会倫理が必然的に帰結する教皇権威主義的世界組織とその前提を確信して提唱される位格的結合の論議を多角的に、しかも拡散して論理と非論理の間隙に駆逐せんと試みて急進的であった。しかし、教会の形式化、世俗化に向けて開始された浄化運動及び教会外部にたつ民衆の反教皇運動がルター主義の教義的要求を遙かに越えて政治的色彩を濃くし、観念論と護教主義を背景にキリスト教が退潮の混乱を兆して無神論が進出し、ブルジョワ民主主義とリアリズムの発見、好奇心めざして実験と観察工夫が現世的課題となった時でさえ、混迷した思想界にトマス説を導入して近代神学の橋渡しを行なったカジェタヌスや、啓蒙思想と極端な Jansenismus の抬頭でローマ教会が危機に貧する教義上の異端説がフランス及びオランダに流布蔓延し、一切の確信が足もとより崩壊せんとした時には唯物主義に対する最善の体系をアルフォヌス・リゴリオがうちたて、シュライエルマッヒャーは宗教講演に於て宗教独自の立場を明らかにしている。そればかりか、空疎な思弁に陥り、宇宙空間的調和を合理的実証精神に試みる科学万能の時代が到来して尚かたくなに無限的存在の超越的認識を求め続けたグラートレイ、フランツ・クラウス、キングスレイ、パウエル・アルトハウスたち真のキリスト者もいた。聖書的核心に絶対理念する形而上学の行方は、対象と意識の相関する志向性の諸相に亀裂しながらも啓示に優位する価値的世界観を擁護するこれら真正のキリスト教徒によって一貫してきた。しかし、思弁的形而上学へと進展するドイツ観念論の潮流が新カント学派によって一挙に抽象概念的意識に規定され、歴史的発展の客観を反映する実験科学の経験論に唯物弁証した時には疑いもなく私的世界観に変化していた。そして、歴史の連続的経過の全体を共通の傾向に基づいて時代区分し、全体的な歴史的発展と関連を保つことによって歴史的時期の不可避な客観的精神を認め、各時代の相互間に史的関係を結びつけて独自の系列を体系する *Zeitgeist* を成立せしめた。経済、生産、組織構造によって決して規定されることない社会的意

義形態の独立性、解釈学的現象学を方法とする基礎的存在論の不安と苦悩、概念と命題の意味を論理的に分析し、意味を持たぬ非経験的形而上学的要素を抹消して経験的検証可能性を意味分析する哲学的態度の世界と人間無視、キリスト教はこれ等完全には弁証不可能な思想の中間で全く異色で多様な歴史主義、史的唯心論的、形而上学的、実験心理学的、神秘主義的、プラグマティズム的キリスト教思想に変革したのである。あらゆる側からの寄せ集めと、整理分析の巧みな統一的連関を実際の観点より究明してみれば、この思想の主張する汎論理主義的形式万能と純論理的虚偽は、今や完全にキリスト教そのものとして完成している。思想の要件する一定の見解、観念、表象、概念はみごとに統合され、世界観的基礎を角度づけた精神的所産は歴史的社会の各段階に於ける意識、歴史の発展に従って段階的に絶対へ近づいてゆく相対的な意識の概念たる *Ideologie* に代置され、必然的に階級基盤を支える位階秩序を拡張して本能概念抹殺の気運を一層加速している。搾取関係の偏見がゆがめてきた社会の歴史と、他方では恐怖政治の狭小さが人間の可能性を限られた一面に制限して、弱さの意志に応じた受動的な反本能運動を人格に関係づけ、絶対優越の思想を類いない聖典にまで高めたのである。

時代のおりなす社会環境に適応して考察を進めたこの意識の流布する歴史現実的世界の絶対否定性は直観的洞察をもって意識下に潜在する論理の矛盾を十分に実証し尽したはずである。あとに残されたものは選言的判断をもって二重真理の主張する認識対象を思想の場に展開してみることだけである。認識の世界に立入りを許さない支配の貫徹を、自ら最高の類型として諸欲求の範型を解釈する僧侶の方法論、*Diese Welt ist scheinbar : folglich gibt es eine wahre Welt ;—diese Welt ist bedingt : folglich gibt es eine unbedingte Welt ;—diese Welt ist widerspruchsvoll : folglich gibt es eine widerspruchslose Welt ;—diese Welt ist werdend : folglich gibt es eine seiende Welt :¹⁰⁾* を仮定ならぬ論理の究極に真理して思想の根源とする言語標示は正当たりうるのか、思索の第一位の誠実さに属する反対の思想の萌出を心理学的実験に供する意図に背景する僧侶の奸計は悪意ではないのか、存在意識の本質から萌出す

る思想を存在意識の本質的なものに強要する思想無視の態度は思想の根源たりうるのか。かかる検証を可能とする思想の命題は *Gelingt es, vom Gedanken aus das Christentum zu entwurzeln, so liegt auf der Hand, wo es anfangen wird, zu verschwinden: also gerade dort, wo es auch am allerhärtesten sich wehren wird. Anderwärts wird es sich beugen, aber nicht brechen, entblättert werden, aber wieder Blätter ansetzen*——¹¹⁾であり、肯定と否定に混在する態度の問題に帰結する。しかも、存在意識を本質する状態に表現して、倫理の実存に挫折した人間の、罪の意識に深化する心理的傾向を解放し、宗教経験の現象する全体的見通しを意識の根底より排除することであり、有為転変無作為に上昇する意欲の荒野に人類を引戻すことである。様々な状態の拮抗する哲学的視点を基点にして遠近法の視線は存在の地平遙かに飛翔し、溢れる認識の形成力が精神性の高さと共に力を伴って回帰する形而上学的世界観を比較実験することである。

独立して純粋な意識と、一般的発展の形で発展する絶対的な意識の概念を総称して思想の根源となる状態をニーチェは包括者と同一の意義に扱い、現存在の究極する価値も認識を前提する状態とみなしている。即ち、根源一者なる超越的存在と、固有の時限に存在理由を確保して感性の彼方に自律意志を究極する能動主体は同義であり、それは思想を根源する *Zustand* のことに外ならない。この規定のもとに思想を認識可能な状態に計測すれば、超感性的世界に森羅万象する現象と理念の寓話的表象々徴は、消化管壁より体液へ素早く吸収されて分解する消化産物の如く摂取と同化の過程を容易く定立出来る。ニーチェのみるところでは、人間全般にわたる無価値と下劣さ、怠惰の欲情を支配する真なる世界、衰退の本能に生への意志を譲り渡した畜群と卑小な種族の氾濫、最早如何にしても健康に生きられぬ出口なき実存のたどり着く終末的世界観には人間にとって何らかの意味のある世界、人類の未来に不可欠の *Ein Wozu?* *Ein neues Wozu?* 人間の新しい偉大さを知る為の、人間を偉大にさせるべき未踏の道をさぐる聖なる目的が欠如していると考える。 *Daß im Christentum die »heiligen« Zwecke fehlen, ist mein Einwand gegen seine Mittel.*

Nur schlechte Zwecke: Vergiftung, Verneinung des Lebens, die Verachtung des Leibes, die Herabwürdigung und Selbstschändung des Menschen durch den Begriff Sünde——folglich sind auch seine Mittel schlecht.¹²⁾ 思索の第一位の誠実さに属する反対の思想を抑制して、極端な仮定の上に成り立つ聖なる虚言を捏造した教皇権威主義の辿り着く末期的症状を高所的展望より概観し、キリスト教の否定する *Wen verneint denn das Christentum? was heißt es »Welt«?* *Daß man Soldat, daß man Richter, daß man Patriot ist; daß man sich wehrt; daß man auf seine Ehre hält; daß man seinen Vorteil will; daß man stolz ist....*¹³⁾ これ等対立して高次の秩序の典型に人類を救済し、人間にとって何らかの意味のある世界を創造すべく個別主体的実存の意欲する意志を過剰な生に実験して試みる。歴史的課題に生きる哲学者というものは必然的に現在する時代の要求に反発しながら未来的展望に生きるものであり、徹頭徹尾誠実な思索者として人類を保存、促進、育成すべき権利を守護し、戦士、審判者、高揚する精神の最高定式としての主たるべく最も高貴な1つの「否」と1つの「然り」を発する。破壊と転倒の長期にわたる没落の系列に、永遠の自己創造と自己破壊のディオニュソス的世界、二重の情欲が秘密する円環の摂理、善悪の彼岸に諸価値を逆転して一切のキリスト教的なものを超克する強さの意志で対置せしめ、失われた多くの人間の素質に由来するものを再び人間の手に戻属せしめ、思想の側より形而上学を実験に供するのが、*Übermensch* の思想である。その為には今は人間が目的を抱き、最高の希望の芽を培うべき時である。

Es ist an der Zeit, daß der Mensch sich sein Ziel stecke. Es ist an der Zeit, daß der Mensch den Keim seiner höchsten Hoffnung pflanze. Noch ist sein Boden dazu reich genug. Aber dieser Boden wird einst arm und zahm sein, und kein hoher Baum wird wehr aus ihm wachsen können.¹⁴⁾

3

架空の諸性質を自らに帰属させ、誤った位階関係に出発した自己認識、錯

覚に原因する禁欲，無私，平等思想の終末的世界観が提示する画一化と組織，機械化，ニーチェはこれ等有罪と判決さるべき廃頹の徴候の告訴人として可能な思想の他の類型を歴史的段階で実験に試みる。人類をどの地点に於て保存，促進，育成すべきかについては尚種々の論議が必要とされるが，枚挙にとまない屈従と恥辱の偏見に充ち充ちた史的唯心的キリスト教思想の主張が結果する搾取と不条理の氾濫は，ニーチェをして強さの意志に由来する，最大の闘争の為の最大の武器，危険としての最大の危機，悪の為の最上級の悪事を上昇する絶対的理念にまで高め，存在の地平に実存解釈の新たなる世界観を実験すべくディオニュソスの乱舞する意欲の谷間に *Übermensch* の再生復活を啓示せしめたのである。人間全般にわたる無価値と下劣さ，怠惰の欲情に衰退する力への意志，歴史が必然する時代の要求に逆行して病的で疚しい良心，これ等思想を根源する超感性的世界観が人類を仮借なき恐怖の迷誤，精神の頹廢に傾向著しい別世界的系列に強制慣習して思想たりうるならば，自力で運命を創る車輪にして第一運動，否そればかりか審美的世界観の恐るべき形容矛盾する包括者として，最も確実なもの，最も証明可能なものを目標に生活を整えることは正当且つ興味ある実験である。かかる試みを偉大と認定して認識を促進するに足る根拠は，時間概念の甚だしい総体的本質を必要とする歴史の裁定に待つ外ない。しかし，行為に於て神聖な精神が永遠の救済を求めて犠牲に供する仮象の世界は一切を起源して創造の中心となる価値観の原点に外ならない。それを如何なる命題に比喻して編成するかは指揮者の意図次第である。

弱さの意志に由来する彼岸的命法に対してニーチェは，強さを基準する此岸的命法のディオニュソンの陶醉をもって高揚する精神の実存解釈を企てる。ニーチェにとって人類愛の方程式は，存在の究極する多様で不確かな欲情の衝動を，人間にとって何らかの意味のある世界，自己を原因流儀として存楽を楽しむ *Ding an sich* の世界に解放することであった。したがって，神の国を実現する為の手段の道具として現世的世界観に無私的实践を強要する教会主義的キリスト教の場合と異なり，アリストテレス的意味での実践と観念活動を同一視し，固有の意味で実的志向体験を現象に還元する主観の世界，一切の拘束から解き

放たれた自由で且つ無価値の世界との内的調和が求められる。形式的格調の厳正さと勸善懲惡的正義を宗教的情操に定理して理性の絶対性を知覚経験に追究すれば、おのずから観照思弁的形而上学に対立緊張する強さの意欲、希望を培う憧れの矢が向う無規定な世界があり、自己の内なる絶対自我と融合一体となって自然の淘汰する進化の過程をさかのぼれば、何ものも要求せず、ただ生の幾千もの可能な実験に存在を楽しむべく感性的官能に戯れ、超感性的世界の影響及ばぬ力の世界がある。かかる世界に人間を解放し、直接的経験の科学実証する先験的意欲をこの世界に調和させ、そこに自律発生する刺戟反応を定理して、未来に向う偉大さの仮説的命題としたのである。ここに言う世界が感性の彼方に自律意志を究極する能動主体、即ち、同義に於て思想を根源する「状態」を意味している。

ニーチェによればある種の状態を仮定する *Übermensch* の概念は、臆測を基盤にして創造意志の彼方に抽象形而するキリスト教とは逆に、生を上げ、高め、肯定是認し、勝利と卓越の精神を誇らしめる一切の地上的なもの、かつて最も忌わしい軽蔑に身を低くしていたこれ等最も意欲的なものを回復すること、肉体を離れていた人間を肉体に引戻すこと、背後世界に別れを告げてこの世の生を体験してみることであった。

Seht, ich lehre euch den Übermenschen!

Der Übermensch ist der Sinn der Erde. Euer Wille sage: der Übermensch sei der Sinn der Erde!¹⁵⁾

それは更に *Gott ist tot!* をめぐる考察の中で確信の根拠と影響力を失う超感性的世界、何故に対する答の欠けたニヒリズムの世界に於て、自らの生成と超克への意志を駆立てる原初的生存の、全く自由な淘汰と発展の法則に外ならない世界、全ての地上的価値を転倒しながらも尚大いなる軽蔑を受容れて復活再生する偉大なる情熱を意味する。

Seht, ich lehre euch den Übermenschen:

der ist dies Meer, in ihm kann eine große Verachtung untergehen.¹⁶⁾

地上に意味のある生存の基盤を築き、大いなる軽蔑の没する海と化した超人

は、最後に既成の諸価値を破壊すべく狂気と稲妻の雷をふるわんとする。稲妻はギリシャ神話、旧約聖書にもみられる如く神の怒りの徴であり、安逸な怠惰をむさぼる人間に向けて発せられた警告である。それは、二重の意味に於ける輝かしい未来を照らす光明でもありうる。狂気はこの稲妻に注がれる絶大な情熱のことである。

Seht, ich lehre euch den Übermenschen:

der ist dieser Blitz, der ist dieser Wahnsinn!¹⁷⁾

超人が内実するこの状態は、生活や生殖、地上的な繁栄価値全てを否定する禁欲主義的理想、制限なく広がるキリスト教倫理社会の危険性を断罪し、著しく歪曲されてきた此岸的なもの、官能性と残酷性によってきたる力の過剰、何者をも圧倒しないではおかない力への意志、意欲する意志の勝ち誇る嘲笑、これら原初的進化の過程に所属する諸条件を正当に扱うべく発せられた1つの「否」と1つの「然り」であった。これまでキリスト教を類いなく発展させてきたのは自己を犠牲に供するという思想であった。それは、2千年にわたって如何なる巨大な思想も可能とせぬ敗北の歴史であった。しかも人間は、自らの性向に服従と犠牲の押さえ難い渴きを持ち、命令の必然的に帰結する支配の関係を飽くことなき献身と忠実の証しとしてきた。無敵の祖国の為に倒れたいと願う兵士の犠牲本能にも似て悲しいこの習性をキリスト教は信仰にまで高め、人間の本性に帰すべき諸々の素質を架空の世界に強要し、他人の犠牲で個人的嗜好の極めて強い形而上学的世界観を創りだしたのである。自ら犠牲と贈り物になりたがる服従の意志を、贈与すべく没落する魂が隣人にとって危険の典型となり、他人の犠牲で生命を促進し、且つ高められる人間の集合としての権力の複合体に転化すべくニーチェは、新しい認識の為の効果的にして一層高貴な権力感情、勇気、率直、節制を人間本性の核心として約束すべく共通の栄養現象を求めたのである。最善のものゝ為に必要な最悪を行なう勇気をおこし、事物のたえざる生成と自己変化、存在の全体にかかわる有機的連関、総合的な世界内存在一般が恐るべき認識の機械的循環をともなつて永劫に回帰する混沌状態に於て、絶望的な否定と肯定、認識の根拠を失った恐るべき孤独に論理矛盾す

る永遠の刹那を意欲する世界に人間を救済することである。既成の諸価値に告げる別離は予測不可能な永遠の正午を輪廻して苛酷である。しかし、自己に対する肯定を獲得したあかつきに問い直される現存在の行方は、自らを愛し、諸々の出会いを永劫に意欲する回帰への憧憬であり、意地悪い敵意より生を保証して過去を止揚し、未来に歴史的影響を果すべく神をも克服する力への意志である。実存的な基礎的経験に対する表現手段としての永劫回帰説は、能動性の最高の緊張と存在に対する最も深い帰依を相互関連せしめ、超人思想が内実する此岸的命法に人類を保存、促進、育成して偉大たらしめる行為を規範している。Gott ist tot! に始まるニヒリズムの極限形式、完結危機として全てのものの無条件にくりかえされる万物循環の説を宗教と形而上学のかわりとし、人間の偶然的実存を本来的実存に引戻すべく意欲を促し、力に奉仕する自己破壊と自己創造の生成超克をニーチェは命じる。Du sollst der werden, der du bist.¹⁸⁾ べく永遠の今に没落する苛酷な運命を過剰な意志の主宰者として意欲し、存在の地平に流儀する die Neuen, die Einmaligen, die Unvergleichbaren, die Sich-selber-Gesetzgebenden, die Sich-selber-Schaffenden.¹⁹⁾ を高貴なる人間の典型として意欲することである。かかる世界のかかる実存を意欲する Ich will! は、喚起された意志の自己超克と、永遠に回帰する生成と超克の ein Neubeginnen, ein Spiel, ein aus sich rollendes Rad, eine erste Bewegung.²⁰⁾ としてより高次の階梯、苛酷な運命の軋轢を幾度となく繰返して愛する Ich bin! へと変転していく。認識された必然性のもとに消極的に服従する替りとして運命の必然性を意識する amor fati, 最も内面的な本性として自らを承認し、生存に対してディオニュソス的に振舞う超越的表現、存在に関して如何なる論議がなされ、独自の实存経験をニーチェ自身の無実体性に置きかえて危機の充満する倒錯者、到る処で無道德な狂気を蒔き散らす進行性麻痺を診断して精神病理学を試みようとも、永遠の基礎を畏怖と崇敬の神秘的経験に保存し、感情の原点として没我的忘我状態に導く心理学の結果する世界観が、意欲する創造精神を喪失せしめ、束の間の倦怠に乗じて健康を奪い、卑小な種族の氾濫で未来に辿り着く方向を持たぬ平行遠近法的終末世界観を眼前に

しているとすればまぎれもなく、人類にとって何らかの意味のある世界、人類の未来に不可欠の Ein Wozu? Ein neues Wozu? 人間の難しい偉大さを知る為の、人間を偉大たらしめるべき未踏の道をさぐる為の、キリスト教思想にかわる超人思想の、此岸現世的世界観への執着と運命愛は、自らを歴史的とのみ感じられる様な精神の健康的で歴史的な実験であると言えよう。確かに、自分自身の光の内に生き、己が吐きだした焰を再び呑みこむ狂気、自分自身を消耗させつつ実存的に自己を消滅せしめる無節度、実存を解釈構成的に問題にしながらも破壊と没落の論証不可能に接近する論理矛盾、ニーチェへの接近を困難、危険にさせるこれら実体不透明なものが交錯して思弁的啓示のみが先行する認識の過激さがある。探究可能な真理と照明可能な真理に協同する認識と超越の二義的倒錯は、とりわけニーチェを推理不可能なものとして社会学と心理学を助長させる結果に導いている。しかし、内在的であるにすぎない概念は世界内事物に関する概念にとどまり、規定的、実際的ではあるが存在の全体を思念する可知的なものを主張することは出来ない。確証する心理学と訴える実存照明の間隙に焦点を定め、逆遠近法的に観照者の立場に立つニーチェの概念的形相はそれ故思弁を越え、現象的事物の相互関係を規定する共通の場、現象的世界の対件であるとともに物理的有機体の中に位置づけられる *Feldtheorie* を実相とする力学的及至条件発生的特性を形容詞的意味で力の運動に表現することである。*Rekapitulationstheorie* 的生物発生原則を純粹意識の合理的な動的産出と考え、歴史的過程を通してその方法を自ら自覚することにより力の運動の車輪、第一運動となり、諸々の知識の普遍する科学実証主義を従えて純粹経験を啓蒙波動する巨視的態度は破局の幻想に終始して否定的な破壊に反復しようとも、精神に強い衝撃を与えて稲妻の如く、憂愁に黄昏れ始めた西欧の文化に最後を審判して狂気の主宰者たりえたと認定出来る。ニーチェの生の独自性は、空虚な思弁を論じて神秘主義を新興せしめる病的篤信家の奇抜さではなくして、かかるギリシャ的意味での文化と人類の救済を前提にしてのみ理解可能な形而上学的実験にほかならない。

注)

- 1) Thomas Mann: Doktor Faustus, Fischer Taschenbuch Verlag, Hamburg 1967. S. 231.
- 2) F. Nietzsche: Der Antichrist, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1921, S. 239.
以下引用は全てニーチェ著作集よりなる。
- 3) Also sprach Zarathustra, S. 38.
- 4) Morgenröte, S. 330.
- 5) Menschliches Allzumenschliches, S. 137
- 6) Der Wille zur Macht, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1964, S. 314.
- 7) Also sprach Zarathustra, S. 35.
- 8) Zur Genealogie der Moral, S. 320.
- 9) Der Wille zur Macht, S. 591.
- 10) ibid. : S. 393.
- 11) Menschliches Allzumenschliches, S. 469.
- 12) Der Antichrist, S. 288.
- 13) ibid. : S. 255.
- 14) Also sprach Zarathustra, S. 19.
- 15) ibid. : S. 13.
- 16) ibid. : S. 14.
- 17) ibid. : S. 15.
- 18) Die fröhliche Wissenschaft, S. 205.
- 19) ibid. : S. 257.
- 20) Also sprach Zarathustra, S. 35.

F. Nietzsche und die christliche Moral

Masatomo Kisaka

Nietzsche hat betont, daß Christen, wie Jean Calvin, der fordert, daß man lediglich für Gott leben soll, und der Gottes souveräne Gnade betont, oder Hieronymus, der sich im innern pietistischen Erlebnis

hervorgetan hat, oder Gratrey, der immer hinter einer überirdischen Erkenntnis des Unbestimmten her war, die, geistigen Halt suchend, den Kern der Bibel aufzufinden trachtete, konträr zu seiner eigenen phantasievollen Weltanschauung stünden, die mit Hilfe einer positiven Untersuchungsmethode zu sozialpsychologischen und kulturanthropologischen Erkenntnissen führt, die Autorität der Kirche auf den Pragmatismus beschränkt und letztlich im Gefilde des Positivismus landet. Nietzsche glaubte eben, daß seine Weltanschauung etwas ganz anders als das Christentum sei. Seiner Meinung nach ist letzteres nur der Gedanke, in dem sich eine Art historisch geformten und sich noch verändernden Sozialbewußtseins sowie Meinung, Idee, Vorstellung und Begriff davon schön zusammengesetzt haben. Es würde noch verschiedener Diskussionen darüber bedürfen, wo die Menschheit bewahrt, gefördert und erzogen werden sollte. Nietzsche hätte es aber für durchaus möglich, den Menschen mit dem Gedanken vertraut zu machen, daß er in einer Welt mit neuer Bedeutung, daß er mit neuer Größe und auf einem noch nicht gewanderten Weg groß werden sollte, falls die Menschheit im Wertlosen, Gemeinen, Herdenmäßigen und trotz aller Bemühungen nicht mehr Lebensfähigen zu ersticken droht und, im Gegensatz zu den pragmatischen Erfordernissen der Zeit, die die Geschichte notwendig haben soll, nur mehr eine eschatologische Weltanschauung helfen kann. Es ist richtig und verdient unsere Aufmerksamkeit, daß das Wesen der mit dem Bewußtsein der Schuld entmutigten Menschen von der jenseitigen Welt zu befreien, die allgemeine Aussicht, worin die Religiöse Erfahrung erscheint, vom Grund des Bewußtseins wegzunehmen und in die Welt vom „Ding an sich“, wo das Selbst als Art und Ursache für sich selbst genießt, zurückzuführen und eine neue Weltanschauung der Existenzauslegung auf dem Horizont der Existenz

zu versuchen sei.

Für Nietzsche bestand die Gleichung der Menschenliebe darin, daß eine Welt von Bedeutung geschaffen werde, worin der Mensch sich nach der Größe richtet. Zu diesem Zweck sollte die Lust, die vom abscheulichsten Verachten zur Erde geworfen war, wiederhergestellt werden, wobei der Mensch, der vom Fleisch gesondert war, zum Fleisch wieder zurückgezogen wird. Und gerade dadurch würde das Leben erhöht, der übermenschliche Gedanke, mit dem man auf den Geist von Sieg und Hervorragenden stolz ist, offenbart und die sich unbegrenzt erweiternde Gefährlichkeit der christlichen moralischen Gesellschaft verurteilt werden. Was diese Weltanschauung, die offenbart wurde, um etwas Diesseitiges richtig zu behandeln, was außerordentlich verdreht worden war, in sich hat, bezieht sich auf das Gesetz der vollständig freien Zuchtwahl sowie ihrer Entwicklung, das heißt, „Der Übermensch ist der Sinn der Erde, des Meeres, des Blitzes, des Wahnsinnes.“ Nietzsche hat die höchsten Werte richtig behandelt, hat Seelenwanderungen als ganz natürliche Fügungen und als menschliches Gesetz betrachtet, hat die Geschichte unter dem Aspekt der Zukunft beurteilt und den Grund für ein bedeutungsvolles Leben auf Erden legen wollen. Wenn bei Nietzsche auch das Dogmatische vorging und er von Krisen und Perversionen, welche die logische Realisierung der Idee verhinderten, geschüttelt worden ist, so verträgt sich sein Verhalten durchaus mit dem Wesen eines Philosophen, der von seiner historischen Aufgabe lebt. Dagegen übertrifft die Originalität von Nietzsche wesentlich den niedrigeren Grad von Negation, Zerstörung sowie Untergang und verlangt nach einer Metaphysik, die nicht mit den Augen zeitgenössischer oder gegenwärtiger Weltanschauungen gesehen werden dürfte.